

共同研究および広域調査概要

アジア・アフリカの多くの国は、20 世紀後半に旧宗主国から独立して誕生した新興国である。これらの国々では、国民国家建設の進展のなかで、国内の多様な人々を統合する必要に迫られていた。その過程で、生存や共同体の存続が脅かされ、国家の中で周縁的な立場に置かれることとなった人々もいた。また、国家によってその政治的重要性が認知され、カテゴライズされて国民化の道を歩む人々の存在もある。このように、本共同研究では、制度や言説によって生み出される多様なマイノリティの諸相を議論の対象とする。それは、さまざまな差異化や同質化の過程で創り出され、時代状況に大きく左右されるものである。具体的には、宗主国からの独立前夜におけるナショナリズムの高揚や政治変動のなかで周縁化されていく人びとの動向や、国民国家形成初期における少数者の様々な葛藤や政治的選択、また、近年さかんに行われつつあるマイノリティの権利運動や文化表象などを取り扱う。国家の成立から 50 年前後の大きな時間軸のなかで、アジア・アフリカのマイノリティを巡る状況の比較考察を試みる。その際、マイノリティという言葉で表象されてきた人びとの政治行動に着目しながらも、かれらの多様な葛藤や交渉について日常への視座から考えたい。2009 年 8 月にはカメルーンの北部と南部に分かれて、先住民問題に関する予備的な広域調査を行った。国民国家やその他の外部アクターとのかかわりの中から人びとの日常に関心を寄せる堀江、首藤、下條は MBOSCUDA という NGO が活動拠点にしている北部地域へ、マレーシアの熱帯雨林における自然保護区と地元住民との関係を対象に研究している佐久間は、カメルーン南部の熱帯雨林地帯に設置されているジャー自然保護区へ、それぞれ訪問した。また、首都ヤウンデでは、ヤウンデ第一大学にて研究報告会を開催して現地の若手研究者や学生と議論を行った。

広域調査：カメルーン南部および西部州

期 間：2009 年 8 月 26 日～9 月 7 日



アフリカの熱海（リンベ）



バカ・ピグミーの子供と彼らの住居



近年、東南アジアにつづいてカメルーンなどのアフリカの
帯雨林保有地域においても、伐採活動が活発化しつつある。
そこに暮らすピグミーと総称される狩猟採集民は、人口的
にも社会的にもカメルーンにおける‘マイノリティ’であり、
こうした開発の影響を最も身近に受ける人びとである。し
かし同時に、彼らは、カメルーンにおける生態人類学的研
究の主要な対象であり続けてきた人々であり、また国際的な
住民運動の展開の中でもその存在が広く知られている人び
とでもある。このような彼らを取り巻く今日の状況は、80
年代後半にマレーシア・サラワク州（ボルネオ）で興隆し
た熱帯雨林伐採反対運動におけるプナンを想起させずには
られない。写真左は、伐採された巨大な丸太を運搬するト
ラック。ボルネオでもこんな巨木はもうほとんど見ない。



ボロロの集落へ行く途中の景色 (Sabga)



馬に乗って Sabga 村へ

ボロロは主に移動牧畜と農耕に従事する人びとである。この Sabga という地域はカメルーンの北西部に位置し、丘陵地に低木が広がる、水と緑の豊かな土地である。20 世紀にこの地に南下してきた際、牧畜に適した豊かな土地なので Lamidat (宗教司祭) が治めるようになり、ボロロの拠点のひとつとなった。(写真左上) 山腹の集落へ行く道には川がいくつも流れており、我々は馬を用いて移動した。しかし、村人たちはふだん徒歩で行き来しており、幼い子供たちも麓の学校まで歩いて登校するそうだ。現在では観光の一貫として乗馬ツアーも催されている。(写真右上)



ボロロの人々が暮らす小集落に到着 (Sabga)



到着後にふるまってもらった牛乳 (Sabga)

Sabga のボロロは、村の中心部から離れた丘陵地に分散した小集落を形成している。しっかりした石組みの家を建て、周囲に牛を放牧して生活している。点在する各集落には親戚が住んでおり、定住度は高い。(写真左上) 牧畜を営むボロロにとって牛乳は最も身近な食品だ。あたたかい牛乳をポットに入れ、客が来るとふるまう。ヨーグルトやチーズなどの加工食品はほとんど作っていないとのことだ。(写真右上)



村内にあるモスク

ボロロを含むフルフルデの人びとはイスラームを信仰している。ボロロコミュニティ支援団体である MBOSCUDA も、イスラーム教育（Anglo-Arabicschool）プログラムを行っている。



ボロロの人びとの生活に欠かせない
家畜（ウシ）



毎朝の搾乳

牛はボロロの人びとのアイデンティティに関わる重要な家畜である。牛の管理は家長が責任を持ち、大切な現金収入の元手である。乳しぼりは女の仕事である。絞った牛乳は基本的に自家消費に充てられ、売られることはほとんどない。現金収入は男性による家畜の売買でまかなわれているが、女性のわずかな収入として卵や牛乳が売られることもある。



ボロロの女性は「女性の財」として食器をディスプレイする

Sabga のボロロの家は、壁を隔てて男の家と女の家とに分かれている。イスラームの戒律から多くの権限を持たないと言われるボロロの女性にとって、食器や調理具は大切な財産だ。かつては装飾を施したヒョウタン製の容器が貴重なものとされたが、近年ではホーロー製の器が一般的になりつつある。



チーズづくり (MBOSCUDA の活動の一環)



ヨーグルトづくり (MBOSCUDA の活動の一環)
(ボロロの人びとのあいだでは、ヨーグルトをつくる習慣はない)

ボロロの若手知識人を主体として結成された MBOSCUDA (Mbororo social and cultural development association of Cameroon) は、女性の経済支援として乳製品の加工と販売を行っている。(写真左上) ヨーグルトも女性の経済支援を主な目的として行われているが、本来ボロロの人びとにはヨーグルトを作る習慣はなく、消費者はほとんど外部者だそうだ。価格も、首都ヤウンデで売られているのと同額に設定しているそうだ。(写真右上)